

第1回アジア競技大会 (1951年) への日本の参加経緯

Events leading to Japan's participation in the First Asian Games in 1951

田原 淳子*, 池田 延行*, 波多野 圭吾**

Junko TAHARA*, Nobuyuki IKEDA* and Keigo HATANO**

I. 研究の目的

第二次世界大戦における敗戦によって、日本の競技連盟 (NF) の多くは国際競技連盟 (IF) から除名された。その後、組織的にアメリカ本国との交流を積極的に行なった水泳やレスリングなどの競技を皮切りに、NFは徐々にIFへの再加盟を果たしていった (田原ほか, 2016)。こうした経緯を経て、日本が戦後初めて参加した国際競技大会は、1951年にインドのニューデリーで開催された第1回アジア競技大会 (以下、「第1回アジア大会」と略す) である。この大会は、1948年第14回オリンピック競技大会 (以下、「ロンドンオリンピック」と略す) では果たせなかったオリンピック出場への願いを1952年ヘルシンキオリンピックへとつないだ重要な大会である。

当時、日本はアメリカの管理下に置かれ、アメリカの日本に対する民主化と非軍事化の方針のもとで多方面にわたり大きな変革がなされていた。この時代に、日本はどのようにして国際大会への復帰を果たし得たのだろうか。それがスポーツ界のみのネットワークで成し得たとは考えにくい。

そこで、本研究では、日本国内におけるスポーツと政治の関係、第二次世界大戦前後の国際関係に着目しながら、日本が第1回アジア大会に参加

する経緯を明らかにすることを目的とした。これにより、日本が戦後初の国際競技大会出場を実現した際の国内外における道筋を明らかにすることができる。この大会はまた、日本がその後、国際競技大会に参加し、開催を準備していく上での基盤になった大会であると見ることができよう。本研究は、これまでの日本のスポーツ史研究があまり究明してこなかった戦後のスポーツと政治の関係の原点を照射する意義をもつと考えられる。

II. 研究の方法

本研究が対象とした期間は、日本が第1回アジア大会についての通知を受け取った1950年2月25日から大会開催日 (1951年3月4日) までとした。主たる史料は、日本体育協会編 (1951) 『第一次アジア競技大会報告書』日本体育協会発行を用いた。同報告書に掲載された関係者の報告文および実行委員会議事録 (全19回) から、特に以下の内容について整理し、検討を行った。

- 1) 日本体育協会と総司令部民間情報教育局 (C. I. E.) とのやりとり
- 2) 日本体育協会と政治関係者とのやりとり
- 3) 日本体育協会と第1回アジア大会関係者とのやりとり

* 国士舘大学体育学部 (Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

** 国士舘大学体育学部附属体育研究所

(Institute of Health, Physical Education and Sport Science, School of Physical Education, Kokushikan University)

4) 第二次世界大戦の影響による日本の参加に否定的な国との関係

5) その他の特記すべき事項

上記の事柄について年表にまとめ、論点を整理し、考察を行った。

Ⅲ. 結果と今後の課題

本研究の結果、以下のことが明らかになった。

1) アジア大会の開催経緯と第1回アジア大会の概況

アジア大会に先立って第二次世界大戦以前に開催されていたアジア地域の総合競技大会は、日本も参加していた極東選手権大会(1913~1934年)である。戦後にアジア大会が開催される直接的な契機になったのは、第二次世界大戦後初の開催となったロンドンオリンピックであった。このときにアジアから参加した6カ国(インド、フィリピン、朝鮮、中華民国(現在のチャイニーズタイペイ)、セイロン(現在のスリランカ)、ビルマ(現在のミャンマー))の代表が集まり、4年に一度、アジアの総合競技大会を開催することで合意したのである。翌1949年12月にアジア大会設立総会がインドのニューデリーで行われ、同大会を主催する組織としてアジア競技連盟(AGF)が設立され、「アジア競技大会憲章」が定められた。このときに中心的な役割を果たしたのはインドの国際オリンピック委員会(IOC)委員ソンディであった(日本オリンピック委員会)。

第1回アジア大会は、1951年3月4日から11日まで、インドのニューデリーで開催された。参加国は、11カ国(アフガニスタン、イラン、インド、インドネシア、日本、ビルマ、ネパール、フィリピン、シンガポール、セイロン、タイ)、出場選手総数は計489名であった(Olympic Council of Asia)。アジア競技大会では、主競技を陸上競技と水泳及び芸術競技(建築、絵画、彫刻)とし、その他の競技については、組織委員会の承認をも

って実施されることになっていた。第1回アジア大会の実施競技は、7競技(陸上競技、水泳、蹴球、バスケットボール、自転車、ウエイトリフティング、芸術競技)であった(日本体育協会、p.7)。

2) 日本の大会参加について

実施された7競技のうち、日本が参加したのは5競技(陸上競技、蹴球、バスケットボール、自転車、ウエイトリフティング)であった。水泳については、大会時期は日本ではオフシーズンで参加選手が十分な練習をしたトップコンディションではないことが他の参加国に対して非礼であるとの見解を同連盟が示したことから、また芸術競技については日本に統括する団体がないことから参加を取りやめた。

大会への出場選手については、参加が決定した競技のNFにおいて選考がなされた。

渡航申請者のうち、北沢清(自転車監督)は教職パーシジ^{注)}のために、また、鈴木義博(陸上)及び松永一夫(蹴球)は第二次世界大戦において憲兵将校(士官)であったためパスポートが交付されず、渡航することができなかった。蹴球では松永に代り、和田津苗が参加した(日本体育協会、p.22、49)。

日本の参加者数については、出典により人数に齟齬が見られた。日本オリンピック委員会によれば、合計84名で、その内訳は役員19名、男子選手58名、女子選手7名であったと記載されている(日本オリンピック委員会)。一方、日本体育協会による大会報告書によれば、派遣団は二陣に分かれて渡航し、合計人数は88名、報道関係者を除くと79名になる。第一陣は浅野均一団長引率のもとに44名(蹴球15、バスケットボール12、自転車5、ウエイトリフティング2、本部5、報道5)が2月25日から同月27日に、第二陣は松沢一鶴団長の引率により44名(陸上34、蹴球1、本部5、報道4)が2月28日から3月1日に、それぞれ羽田空港を出発し、途中、沖縄、バンコックを経由してニューデリーに到着したと記されている

（日本体育協会、p.22）。一方、総司令部が渡航を許可した人数は77名との記載もあり（日本体育協会、p.22）、参加人数については、さらに慎重に精査する必要がある。

3) 第二次世界大戦の影響から日本の参加に否定的な国との関係

フィリピンは、第二次世界大戦前までは、日本とともに極東競技大会の主導権を握った国家であったが、同戦争により対日感情が悪化していた。そのため、日本が第1回アジア大会に参加する意向であることがアジア諸国に伝わると、フィリピン体協代表のヴァルガスから日本の参加に賛成できない旨の意見表明がなされた（日本体育協会、p.19）。

一方、国際陸上競技連盟総会に出席したフィリピンのイラナンは、大会準備の遅れからインドで第1回アジア大会を開催するのは困難であると述べた。これを聞いた日本側は、もし会場がフィリピンに移された場合には、当地の反日感情から日本選手の身の安全が保証できないとして、日本の参加は難しくなるとの見方を示した（浅野、p.6）。

また、第1回アジア大会への渡航には、当初、フィリピン航空を二機チャーターする予定であったが、時局の関係から困難になり、他社と折衝を始めなければならないといった支障が生じた（日本体育協会、p.26）

4) アジア競技大会における日本の立場

アジア大会の創設が話し合われた1948年ロンドンオリンピックの際の会議には、日本は参加していなかったものの、アジア競技大会に日本は好意的に受け入れられたと見ることができる。1950年7月31日にニューデリーで開催されたAGF第2回評議員会において、日本の参加が条件付で承認された。その条件とは、IOCの方針に従い、NFがIFに復帰した競技のみをアジア大会においても参加可能な競技としたことである（松沢、p.15）。この時点で、日本はAGFの正会員には承認され

ていなかった。日本が正会員に承認されたのは、1951年3月3日に第1回アジア大会に合わせて開催された第3回評議員会においてであった。前述の松沢によれば、閉会間際に議長のパテアラ侯より提案され、「満場破れるような賛成拍手のうちに可決され」と記されている（松沢、p.16）。同年3月10日に開催された評議員会の第3セッションでは、役員（会長・副会長）に続く実行委員の選出において、日本はセイロンの推薦演説を受け、投票の結果、最高点で選出された（他の実行委員は、インドネシア、インド、アフガニスタン）。

5) スポーツ国会議員連盟の関与

第1回アジア大会への派遣にあたり、スポーツ国会議員連盟が果たした役割は大きい。特にGHQや政府と体協との橋渡しを行い、体協側からもそれを期待されていたと言える。

フィリピンが日本のアジア大会参加に不賛成であるとの情報が入ると、体協はスポーツ国会議員連盟の協力を得て、打開策を検討した。これを受けて、同議員連盟の代議士（川崎秀二、河野謙三、渡辺良夫）は、1950年3月3日、C. I. E. 局長ニュージェント中佐を訪問し、日本の参加について協力を依頼し、併せてフィリピンへの対応についても懇請した。

国会においては、川崎代議士が同年3月9日の第8回予算委員会で吉田茂内閣総理大臣に日本の第1回アジア大会参加について政府の協力支援を求め、理解を得た。川崎らは、大会への派遣促進の決議案を作成して各派の賛成を得て、第9回国会に提案した。スポーツ国会議員連盟は、12月7日衆議院本会議において第1回アジア大会選手団派遣についての支持決議案を上程し、可決させたのである。（日本体育協会、p.22-24）

渡航の前には、スポーツ国会議員連盟招待歓送会が、1951年2月22日に衆議院第二会館で開催された（日本体育協会、p.32）。派遣団には、スポーツ国会議員連盟からの強い要望により、小西英雄（自民党）が参加し、ホッケー見學員として

広堅太郎が同行した（日本体育協会、p.22）。

以上のように、体協とスポーツ国会議員連盟との結びつきは極めて強固であった。

6) 派遣費をめぐるスポーツと政治の構造

選手団の派遣費は全体予算が当時の2,600万円という龐大な金額になったため、体協は予算総額の約半額を国庫補助による方針を定め、文部省を通じてその獲得に努めた。残額については、出場選手選出の所属団体、各都道府県体育協会、及び一般寄附金の三本立とした（日本体育協会、p.21）。国庫補助の獲得のためには、政府や行政側の理解と協力を得ることが不可欠である。そこには、スポーツが政治に頼らざるをえない構造が存在し、スポーツ国会議員連盟がその橋渡し役として活躍する仕組みが出来上がっていたと考えられる。

1951年2月21日、体協において第1回アジア大会日本選手団の結団式が行われた。そこでは、秩父宮殿下賜旗授受、三笠宮殿下御言葉に続き、以下の6名が祝辞を述べた（日本体育協会、pp.32-33）。①C・I・E ニュージェント中佐、②E・S・S マーカット少将、③内閣総理大臣、④文部大臣、⑤国会スポーツ議員連盟会長、⑥スポーツ振興会議議長。これらが日本選手団の第1回アジア大会派遣に重要な役割を果たした組織の顔ぶれであるといえよう。

以上の結果から、今後の課題として浮かび上がったのは以下のことである。本研究の主たる史料とした日本体育協会編『第一回アジア競技大会報告書』は、優れて詳細な報告書であるが、日本からの視点で描かれていることが多かった。例えば、日本が参加しなかった芸術競技や他国の参加者数などの記載がないなど、大会の全貌を知る上では

課題が見られた。今後は、こうした欠落部分を埋める情報を他の国や組織、外国メディアなどの史料から収集し、第1回アジア競技大会の全貌をより広く俯瞰して、その意義を明らかにしていきたい。

本研究の一部は、平成28年度国士舘大学体育学部附属体育研究所の研究助成により実施された。

注及び引用・参考文献

- 注) 教職ページ: 教員レッド・ページとも言う。1949(昭和24)年、共産主義の拡張を警戒するGHQの影響のもと、全国各地で共産主義者やその同調者の教員が罷免・解雇された(函館市史デジタル版)。
- ・浅野均一(1951) 第一回アジア競技大会について。第一回アジア競技大会報告書, 日本体育協会, pp.5-10.
 - ・函館市史デジタル版, 北海道及び函館の教員レッド・ページ. http://archives.c.fun.ac.jp/hakodateshishi/tsuusetsu_04/shishi_06-01/shishi_06-01-05-02-04.htm (2017年3月17日閲覧)
 - ・川崎秀二編(発行年記載なし) スポーツ議連二十五年史. スポーツ振興国会議員懇談会.
 - ・松沢一鶴(1951) アジア競技連盟評議員会の報告. 第一回アジア競技大会報告書, 日本体育協会, pp.12-18.
 - ・日本オリンピック委員会, アジア競技大会, 日本の参加状況(夏季) http://www.joc.or.jp/games/asia/sanka/summer_asial.html (2017年3月17日閲覧)
 - ・日本オリンピック委員会, アジア大会物知り事典. <http://www.joc.or.jp/games/asia/history/> (2017年3月17日閲覧)
 - ・日本体育協会編(1951) 第一回アジア競技大会報告書. 日本体育協会.
 - ・Olympic Council of Asia, 1st Asian Games. <http://www.ocasia.org/game/GameParticular.aspx?CTueswu3duaJ2ChZBk5tvA==> (2017年3月17日閲覧)
 - ・田原淳子・千葉洋平(2015) 日本の競技団体におけるスポーツ国際交流史 —第二次世界大戦前後のオリンピック競技大会競技を中心に—. 国士舘大学体育研究所報, Vol.34: 65-68.

表 日本の第1回アジア競技大会参加経緯

年月日	アジア競技大会当局	日本体育協会(体協)	総司令部民間情報教育局	政治関係者	その他
1950(S25). 2. 25	第1回アジア競技大会に関する審判(1950年2月1日付)がアジア競技連盟(Asian Games Federation: A.G.F.)会長バハラアホックより日本オリンピック委員会へ書翰に到着(インド外交使館経由総司令部民間情報教育局から連絡)				
3. 1		体協は国際スポーツ委員会を開催し、第1回アジア大会への参加を申し合わせ、同日、報道関係に発表。			
3. 2		体協の東会長及び浅野国際スポーツ委員会委員長は、総司令部及び文部省をそれぞれ訪問し、第1回アジア大会参加への協力を懇請。			
?					日本の参加がアジア諸国に伝わると、フィリピンからフィリピン体協代表ヴァルガスは「日本が参加するのは賛成を表明し難い」と発表した旨、ヒフ電が体協に連絡。
3. 3		フィリピンが日本の参加に否定的であるとの情報を受けて、体協は国会スポーツ議員連盟の協力を得て、打開策を検討。		国会スポーツ議員連盟では、川崎秀二(民主党)、河野謙三(自由党)、渡辺具夫(自由民主党)の三代議員が、総司令部民間情報教育局(C. I. E.)長ニューゼント中佐を訪問し、日本の参加方についての積極的な協力を依頼。フィリピンが日本の参加について不賛成の意向を明瞭にしたため、日本の参加についての斡旋を要請。この要請に対し、ニューゼント局長は善処することを約束。	
3. 7		体協はアジア競技連盟秘書会計ソンドに宛て、東龍太郎会長名で第1回アジア大会への参加申込書(3月7日付)を提出。			
3. 9					第8回国会予算委員会で、川崎秀二代議士は吉田内閣総理大臣に対し、終戦後初となる日本の第1回アジア大会参加について政府は協力を支援すべき旨を述べ、首相は理解ある態度を示した。
4. 3	AGF会長より日本体協からの参加申出到着の公文書(4月3日付)送付。	東会長、浅野国際委員会総務主事がIOC総会、国際陸上競技連盟会ならびにIOC実行委員会への出席のため渡欧。浅野は、フィリピンのイヴァンが1949年12月にインドのニューデリーを訪問し、インドでアジア大会開催は困難との印象を受けたことを聞く。			
7. 31	第2回AGF開催。日本がAGFのメンバーであることを承認。第1回大会に日本の参加を承認するかについて協議。ヴァルガスは、フィリピンにおける世論は日比間に譲和条約が締結されるまで日本の参加に反対であると述べたが、日本がオリンピック参加を承認する場合はAGF幹事委員会が欲すれば日本チームの参加を承認することができると述べる。サーゲイ・ナジブ・ウラー閣下は、IOCがその決定を各FFに委ねたので、日本チームはその各種目が1年遅滞を承認されると同時にアジア大会への参加が承認されるべきだと提案し、これに全会一致で同意。				
8. 15					
8. 2	第2回AGFの議事録(7月31日開催)が送達。				
9. 27		第7回国際委員会。すでにIFへの復権が承認された陸上、水上、蹴球は参加資格があると認定され、第1回アジア競技大会に日本が参加することを全会一致で承認。			
10. 21	大会組織委員会にて実施種目を決定。実施種目は陸上競技、水上競技、蹴球、バスケットボール、自転車、ウエイトリフティング及び芸術競技に確定。				
11. 3		国際委員会、第1回アジア競技大会派遣選手団後援会を設置する方針を決定、同会長に平沼英三を推薦。			
11. 15		国際スポーツ委員会、常任委員会、第1回アジア競技大会実行委員会を組織することとし、会長は東会長、委員長は浅野野一に決定。			
11. 25		第1回実行委員会、日本チームには、水上競技(オフシーズンのため)と芸術競技(統括団体未組織のため)を不参加とし、4種目(蹴球、バスケット、蹴球、バスケット)2、自転車、ウエイトリフティング3、本部8)の代表団派遣を申し合わせる。幹事に北沢清、アタッシュに在インド根本龍太郎を要請し、各参加団体派出の実行委員は、北沢清(自転車)、鈴木良徳(陸上競技)、船多龍平(蹴球)、秋山圭秀(バスケットボール)、飯田勝成(ウエイトリフティング)。			
11. 27		東会長、浅野専務、東(俊)常務理事が各派政党、衆参両院議長、大蔵省、文部省、外務省、経済安定本部等関係方を回り、陳情説明。派遣費国庫補助について協力を依頼し、賛成を得た。			
?		CIEに体育担当のニューフェルド氏を訪れ、国内の派遣協力について報告し、援助を依頼。ニューゼント局長及びルミス議長に対し配慮を懇請。(第2回実行委員会報告:11月30日)		川崎、河野、松本(社会党)の3議員が派遣促進の決議案を作成し、各派の賛成を得て第9国会に提案し大いに援助するとの反応を得る。(第2回実行委員会報告:11月30日)	
11. 28					スポーツ振興会議で川崎委員から、大蔵省では予算は政府補助金二分の一では通過困難であると言っているため、むしろ民間寄附より少ない方がいいとの発言あり。
12. 3	大会会長バハラアホックから、体協側に正式招請状が届く。				
?		東会長は総司令部参謀部エレンブッシュ氏を訪問し、援助を依頼。関係書類提出の要請があり、応じる準備。松本理事も別の経から話を進めている。(第3回実行委員会報告:12月7日)			
12. 7					衆議院本会議において第1回アジア大会選手団派遣の決議案採択
		東会長及び松本理事を介して総司令部に連絡中、日本政府が派遣方針ならびに差支えなからうとの意向。(第4回実行委員会報告:12月14日)			
12. 25		外資獲得申請書渡航申請書を12月25日ごろまでに外務省へ提出すると、同書類の提出は候補選手全員が対象。(第4回実行委員会報告:12月14日)			
		候補者91名の手続きを提出。12月26日の全体的な審査を経て、1月9日の渡航審議会に上程される。(第6回実行委員会報告:12月28日)			
1951(S26) 1. 6					渡航審議会で一府60名の渡航が許可される。国庫補助金が閣議決定。
1. 18					外資57.543ドルが許可される。
1. 24					
1. 23		政府補助金を文部省を通じて小切手で受領。			
1. 23			総司令部より77名の渡航が許可される。		
2. 1		国会関係及び文部委員等に対する連絡不十分との注意喚起があり、東会長が関係方面に諒解を求めたことによる。(第12回実行委員会報告)			
2. 21		結団式・社行会を体協にて開催。			
2. 22					
3. 4-11	第1回アジア競技大会(ニューデリー)				スポーツ議員連盟招待款送金が衆議院第二会インド使節代表による招待会が同代表宅で行われる。